

有栖山通信

一人の文士が二次元空間における病的恋愛思想を祖として織りなす純愛物語を近年秋葉原文化が到達した少女人物造形の精華の果てを近年進化したる軽量文芸形態への敬意と繋げ病みし情熱を以て筆を取り鍵盤を叩き電鼠を駆りて織り上げた怨念乃至は情念溢るる射干玉の如き小説也。

第一〇〇〇二三号

有栖山葡萄



 PARKALICEYAMA

速瀬水月に呼び出され、平慎二は彼女に指定されたカフェを訪れた。彼はポケットに入れた携帯を探りながら店内を見渡した。すると見逃しそうな一番奥まった場所に彼女は座っていた。

「よう」

「あっ、うん」

彼はテーブルに近づき、軽く手を挙げ彼女に声をかけると向かいの席へ座った。速瀬の妙に歯切れの悪い返事と顔つきを見て、彼の気持ちは重くなる。

「ごめんね慎二君、急に」

「別にかまわないけど」

それ以上、彼はなにも言わなかった。

二人が最後に会ったとき、彼女はかなり荒れていた。そして今日の彼女もそのときと多少違っているが、似通った危うさを感じさせた。

ちようどウェイトレスがお冷やを持ってきて、彼が珈琲を注文している間、二人の間の沈黙は続いた。

「なんか、私が慎二くんを呼ぶのは、こんな時ばかりだね」

速瀬が呟くような話し方で切り出す。

彼は自分の予感が外れていないことを確信した。弱々しく笑っている彼女の顔をじつとみる。そして彼は一拍おいて、彼女に問いかけた。

「なにかあったんだ」

前回は酒の席から、そのまま勢いでベッドへとなだれ込んでしまった。今日は同じ過ちは起こさないと、心の準備はしていた。

「慎二くん、おちついてるね」

彼は心の準備をしていたとはいえ、実際は落ち着いてなど居ない。しかし彼女の様子をみて、狼狽えていられなかった。

「俺は聞く側だから」

彼はゆつくりと珈琲を飲み、間の長い会話の隙間を埋める。

「妊娠」

沈黙に速瀬から突然投げ込まれた単語に、彼の手にしているカップの水面が揺らぐ。

「何ヶ月なんだ」

慎二はカップを置き、速瀬をじつと見て聞き返した。

「大丈夫だよ。慎二くんとの、あの日じゃないから」

「そうか……残念だな」

最後まで速瀬の耳には届いていないが、彼女は彼の落胆を感じ取る。そして自分の選択が誤りだったのかと、一瞬揺らいだ。しかしどうしても、譲れない部分があった。

「孝之はね、喜んでくれなかったの。それどころか遙と別れることに悩んでる」

「ちよつとまった。どうしてそこで、涼宮さんの名前が出てくるんだ」

慎二は驚いた。速瀬と孝之の二人は、元通り付き合っているとはかり慎二は思っていた。

「まさか、孝之の奴……」

「あの日孝之のうちに帰ってから、必死にすがったの。孝之のそばに居たい、ずっと居させて欲しいって」

慎二は黙って速瀬の話聞いていた。

「孝之は私をそばに置いてくれたわ。だけどそれは二番目、結局遙とは別れなかったの」

慎二は痛みを感じるほど喉が乾いていた。しかし静かに語る水月から目を離せず、身動きすらできなかった。

「はじめはね、それでもいいと思ったの。孝之の横に少しでも居られるなら、それで十分だって。でもそれはただの思い込みだって、自分に言い聞かせてるだけなんだって、気づいちゃったの」

速瀬は切ない笑顔を慎二に向けた。

「どうしても孝之を独り占めしたくて、嘘を付いたの。子供なんて出来てない」

速瀬の頬に涙が一筋流れ落ちていく。

懺悔。彼が聞かされたそれは、彼女の懺悔だった。

彼は思う。

自分は神や神父じゃない。目の前で苦悩している彼女に惚れている、ただの男に過ぎないと。

「速瀬、もう孝之とは、」

「でも私には孝之しか居ないの、孝之との幸せしか考えられないの」

慎二の声を遮って速瀬が訴えてくる。彼女の絞り出した声は彼の心を切り刻んだ。そしてあやうく一步を踏み出した衝動に駆られる。

しかしその痛みに、衝動に、慎二は必死に耐える。

そして彼女の幸せのため、踏みとどまる。

彼女が求めているのは、自分が代わりになることじゃない。孝之への罪を、一緒に背負ってほしいだけだと考える。

「だったら隠し通せ。速瀬が幸せになるために孝之が必要だって言うんなら、絶対に奴を離すな、諦めるな」

速瀬はじつと黙って聞いている。

「正直、俺は涼宮さんのことはよく知らない。ただあの事故で三年も昏睡していた彼女には、孝之しか居ないってのはわかる。だけど速瀬だってこの三年、孝之の傍であいつを支えてきたんだろ。そのことは傍で見えていた俺が、誰よりも知っている」

「でも私は孝之を騙して。だからその罰が」

「なにが罰だ、嘘のなにが悪い。一緒にいたいんだろ？世の中綺麗事だけじゃ、どうにもならないこともあるだろ」

「そう彼女が求めているのは、その迷いを否定してくれること。慎二くん、ありがとう」

速瀬は先ほどまでとは違って、吹っ切れた顔をしている。しかし慎二の心はまた痛み出す。速瀬はそれで本当に幸せになるのだろうか。どうしても信じ切れない自分が居た。

「それじゃあ子供できてないと困るから、慎二くん手伝って欲しいな。妊娠だっていつてから、孝之がしてくれなくなっちゃったから」

速瀬が笑顔で言う言葉を、彼は理解できなかった。

「ふふふ、妊娠さえしなきゃ、孝之は私のものだから。綺麗事だけじゃどうにもならないんだものね」

いつもの戯言

はじめまして&おひさしがり、本日は御立寄りいただきありがとうございますにゃん。

「有栖山 葡萄」と申します、しがない二次創作小説書き同人屋にございますにゃん。

ただだんに語尾ににゃんをつけてただけじゃ全然可愛く見えないのですわ。

にゃんだふる！は良い歌です、はい。

ってことで、ふゆこみ！（4文字タイトルっていつ組み合わせ枯渇するんだろ？）

「君望 NovelSeries」11作目、いかがでしたでしょうか。夏のペーパーで告知した「もっと遙が黒く上げつない奴をやりたいですねえ〜」という公約どおり、それはもう上げつない話に。「懐こ逃げて〜」という感じでしょうか。あとは作品にも書かれていますが設定は2009年横浜。来年には君望の登場人物達も三十路となるのですが、20代最後の年はギンな大人な彼らの人生に疲れた感じが出ていけばよいなと。2011年は君望発売10周年、記念合同誌的な派手な企画をやりた……やりたます！

キウいえば「国際オルタバカ会議」に参加していたのですが、TEが君望的ですよって！？なんかとてつもなく気になってきたうえに、媒体が小説なのでさっキく手を出します。あとはPVのラストの台詞がしびれた。キウ！キレがすきなんですよ！！

ということで銃器公式メカ設定資料集を真剣に読んでみようかと思えます。グレーゾーンを大切にしている age 様には一生ついて行きますから！

さて、ヤンデレ読者の皆さまに。

ヤンデレアンソロジー属性y dシリーズですが、来年の秋頃までお休み。

ヤンデレ小説大賞はそのときに発表となりますが、なかなかいい作品が集まりましたのでお楽しみに。ちなみに第二回は密かに開催中！

次回イベント予定は、いまのところありません。

1月にドリクラ、2月にヤンデレおんりーがあります、諸般の事情によりサークル参加は見せりとさせていただけます。たぶん一般参加では顔を出すことになるとは思いますが、新作はしばらくお待ちいただければと……

今回も短編をつけてみました、お楽しみいただければ幸いです。ひょっとするとふくらませて次の夏コミ作品となるかもしれません、そのときはまたひと味違った色合いにしたいと思っております。ということで次回作もご期待くださいませ。

それでは、またどこかでお会いしましょう。

2009年師走 有栖山葡萄様

2009年12月31日発行

発行所

ありすやまこうえん
有栖山公園

<http://www.aliceyama.jp/>

budou@aliceyama.jp